

日语
复合格助词和
汉语介词
的
比较研究

马小兵 著



北京大学出版社

H364.2

14

日语复合格助词和汉语介词 的比较研究

马小兵 著

北京大学出版社
北 京

图书在版编目(CIP)数据

日语复合格助词和汉语介词的比较研究 / 马小兵著. —北京: 北京大学出版社, 2002. 12

ISBN 7-301-06030-0

I. 日… II. 马… III. 日语-助词-对比研究-汉语-介词
IV. H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2002)第 093038 号

书 名: 日语复合格助词和汉语介词的比较研究

著作责任者: 马小兵 著

责任编辑: 杜若明

标准书号: ISBN 7-301-06030-0/H · 0812

出版者: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区中关村北京大学校内 100871

网 址: <http://cbs.pku.edu.cn>

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62753334

印刷者: 北京大学印刷厂

发 行 者: 北京大学出版社

经 销 者: 新华书店

890 毫米×1240 毫米 A5 开本 8.125 印张 233 千字

2002 年 12 月第 1 版 2002 年 12 月第 1 次印刷

定 价: 15.00 元

序 文

私が馬小兵君と初めて出会ったのは、馬君が北京大学を卒業して、北京大学大学院修士課程日本語文学研究科に在学中、日本語日本文化特別研究生（日本国文部省奨学生）として、筑波大学に1年間留学することになり、私の研究室を訪ねてきた時のことである。確か、広島大学名誉教授藤原与一先生からの紹介があったように記憶している。今、記録を調べてみると、それは1985年の秋のことである。ついこの前のことのように思っていたが、随分長い時間が経過している。

その時は大学院の私の授業に参加するくらいで、親しく研究指導をするというようなことはなかった。その後、私は、1987年の3月から7月にかけて在中国日本学研究中心に出講し北京市の友誼賓館に滞在した。また、その翌年から日本学研究中心の碩士答弁委員会が始まり、私はその第1回から第3回まで、1988年10月、1989年12月、1990年11月と毎年その会に出席し、友誼賓館に宿泊した。その間、馬君とは何度か会い、北京大学に案内してもらったりもした。そして、馬君に筑波大学大学院の私のもとで研究をしたいと打ち明けられたのは、友誼賓館の北配楼（現、敬賓楼）のロビーだった。その場所と場面とは鮮明に記憶しているが、それが何年何月のことであったかは定かでない。1987年の時の部屋は北配楼ではなかったのも、わざわざそのロビーで会うはずがない。とすると、碩士答弁委員会のいずれかの年であったか。

念願がかなって馬君が筑波大学に在籍できるようになったのは、1991年4月のことである。規定により、初めの一年間は研究生である。一年後の入学試験に合格して、1992年4月に筑波大学大学院博士課程によりやく編入学することができたのである。私

と最初に出会った時からすでに7年になろうとしていた。最初の出会いから大学院入学までの経緯をいささか詳しく述べすぎたかもしれないが、目標に向かって粘り強く努力を続けた馬君の意志の強さは称賛に値するものがある。

しかし、馬君の努力は、ここからがむしろ大変であった。筑波大学における日本語研究は、その方法においてもその内容の深さにおいても、中国におけるそれとは全く違っていた。馬君は、まず研究の方法を会得するのに苦労しなければならなかった。また筑波大学大学院における日本語研究のレベルはきわめて高く、日本人学生でも課程在学中に博士の学位を取得できるものがいなかった。馬君も私の研究指導のもと厳しい研究を強いられた。私は1998年4月に筑波大学長となり、教授職から離れて、馬君の研究を直接指導することができなくなったが、馬君も同じ年の6月には大学院を単位取得退学して、東京のいくつかの大学で講義をしながら、博士論文をまとめる生活に入った。この最後のまとめの期間が最も苦しく大変だったのではないかと推察する。私は自分が最後まで直接研究指導をしてやれなかったことを申し訳なくまた残念に思い、馬君に筑波大学大学院に入学することを許可したのは誤りであったのではないかと反省さえた。それだけに、今回めでたく学位を取得しこのようにその学位論文を刊行できることになったのは我がことのように嬉しい。「馬君、おめでとう」と心から快哉を叫びたい。

馬君の研究テーマは、一貫して、日本語の複合格助詞と中国語の介詞との対照的研究であった。その詳細については、直接本文をお読みいただきたいが、いろいろと解明されたところが多い。分析の方法についても、説明の仕方、結論の出し方などについても、さらに検討し改善すべきところがあるし、研究対象とすべき日本語の複合格助詞や中国語の介詞もまだ数多く残っている。しかし、それらのことは馬君自身がすでに自覚しているところであり、本書に盛られた成果はそれとして高く評価してよいものである。

馬君には、これまでの試練とそれを乗り越えた経験を良き糧とし、これまでに達成できた研究成果を基盤として、一層の成長発展をされることを期待したい。

2002 年中秋

筑波大学長 文学博士

北原保雄

序 言

我和马小兵君最初相识是马君北京大学毕业后，在北京大学研究生院日本语言文学专业攻读硕士研究生期间，作为日本语言日本文化特别研修生(获得日本文部省奖学金)，到筑波大学留学一年，来我的研究室拜访的时候。记得是广岛大学名誉教授藤原与一先生向我推荐的马君，现在，回忆起来那是一九八五年秋天。这一幕就像不久前发生的事情一样，但是迄今已经过了许多时光。

那时，我对马君并没有像对自己的研究生那样，亲自进行研究指导。其后，我从一九八七年三月到七月在中国日本学研究中心讲学，住在北京友谊宾馆。另外，从一九八八年开始，日本学研究中心开始成立硕士答辩委员会，我在一九八八年十月、一九八九年十二月、一九九〇年十一月，即从第一次到第三次担任了该答辩委员会的委员，每次都住在友谊宾馆。在此期间，马君多次来拜访我，并陪同我参观过北京大学。马君向我表示希望到筑波大学研究生院在我的指导下进行研究，是在友谊宾馆的北配楼(现在的宾楼)的前厅。对这一场所和当时的场面我至今还记忆犹新，但是至于那是哪一年哪一月，我的记忆则有些模糊。一九八七年我不是住在北配楼，所以不会特地在那里和马君见面，那么，时间可能就是上述三次担任答辩委员的其中一次了。

一九九一年四月，马君实现了自己的愿望，进入了筑波大学。按照规定，第一年是做研修生，一年以后，马君通过了入学考试，于一九九二年四月终于编入筑波大学研究生院博士课程。这从我和马君相识之时算起已经快到第七个年头了。对我同马君相识到马君进入研究生院学习这一过程的叙述也许过于详细，但是，马君朝着自己的奋斗目标不懈努力的顽强精神值得称赞。

然而，不如说从此开始，马君踏上了一条艰苦奋斗之路。筑波大学的日语研究无论在其方法上，还是在其内容的深度上都与中国

的日语研究完全不同，马君首先在掌握研究方法上就颇费了一番周折。另外，筑波大学研究生院的日语研究水平非常之高，就连日本学生在校期间也没有人取得过博士学位。马君在我的指导下从事非常严格的研究。我一九九八年四月担任筑波大学校长，脱离了具体的教学工作，不能具体地指导马君的研究；马君也在同年六月研究生院(学分修满)修了，一边在东京的几所大学讲课，一边进入完成博士论文的最后作业。可以推测最后这段时间对马君来说是最为艰苦的。我对自己没能直接指导马君最后完成博士论文感到很抱歉和遗憾，甚至反省批准马君进入筑波大学研究生院学习是否有过失误。正因为如此，我对马君最后圆满地取得博士学位，而且这次马君的博士论文能够得以出版，像我自己的事情一样感到由衷的高兴，我从内心里欢呼“马君，祝贺你。”

马君一直以日语复合格助词和汉语介词的比较研究作为研究课题，其详细内容，请读者直接阅读本书，本书清楚地阐明了许多问题。当然不论在分析问题的方法上，还是在进行论述和提出结论的方法上，都有应该进一步探讨和改善之处，同时作为研究对象来说，还有许多日语复合格助词和汉语介词需要进行论述。然而这些马君自己已经清楚地认识到了，总之对于本书所论述的成果应该给予高度的评价。

我由衷地希望马君把迄今为止的磨练和闯过难关的经验作为宝贵的精神食粮，在已经取得的研究成果的基础上，更上一层楼。

二〇〇二年中秋

筑波大学校长 文学博士
北原保雄

目次

第一章 绪论	1
1. 本书的写作目的	1
2. 有关日语复合合格助词和汉语介词的定义	4
2.1 复合合格助词的形态特征	5
2.2 复合合格助词的句法特点	7
2.3 复合合格助词的语义特点	8
3. 本书的研究范围——日语的格、格助词、格关系、 格体制之间的关联以及汉语的格和介词的关联	14
4. 日语的格助词和格体制	15
5. 本书的构成和概要	19
第二章 关于汉语介词“对”和 日语复合合格助词「に対して」	22
1. “对”和「に対して」的意义	22
2. 汉语介词“对”和日语复合合格助词 「に対して」的分类	25
2.1 汉语介词“对”的分类	25
2.2 日语复合合格助词「に対して」的分类	25
3. 汉语介词“对”和日语复合合格助词 「に対して」的对应	28
3.1 表示方向的“对”和「に対して」	28
3.2 表示对象目标和表示对待关系的 “对”与「に対して」	37
3.3 表示涉及关系的“对”和「に対して」	65
4. 「に対して」的用法分类和“对”	71

4.1 能够同宾格助词「を」替换使用的 「に対して」构成句子的谓语动词	71
4.2 能够同补格助词「に」替换使用的「に対して」	73
4.3 不能与其他格助词替换使用的「に対して」	74
4.4 关于「N+数量詞+に対して」和 「……のに対して」	77
5. 小结	78
5.1 汉语介词“对”的分类	78
5.2 关于日语复合格助词「に対して」的句法特征	80
5.3 关于日语复合格助词「に対して」的分类	80
5.4 汉语的介词“对”和日语的复合格助词 「に対して」的对应关系	81

第三章 有关日语复合格助词「について」和

汉语介词“关于”	83
1. 「について」和“关于”	83
2. 以往有关「について」和 “关于”的研究以及问题所在	85
2.1 以往有关「について」的研究以及问题所在	85
2.2 以往有关“关于”的研究以及问题所在	90
3. 「について」和「については」	91
3.1 「について」的用法	91
3.2 「について」和「については」	92
4. 「について」的用法分类和意义	92
4.1 「について」的用法分类	92
4.2 「について」可以与其他单个格助词 替换使用的类型	93
4.3 「について」及其前置名词共同修饰 谓语部分的类型	108
4.4 「について」的意义	109

5. 「については」的意义和用法	110
6. 有关“关于”的分类	114
7. 「について」和“关于”的对应关系	119
8. 小结	120
8.1 纵观以往对「について」和 “关于”的研究, 确认问题所在	120
8.2 把「について」和「については」 区分为两种不同的用法	120
8.3 「について」的分类	121
8.4 「については」的分类	121
8.5 “关于”的分类	121
8.6 「について」和“关于”的对应关系	121
 第四章 关于汉语介词“作为”和	
日语复合格助词「として」	124
1. “作为”和「として」的意义	124
2. 以往有关“作为”的研究及其问题所在	128
2.1 “作为”的意义	128
2.2 “作为”的分类	128
3. 以往有关「として」的研究和问题所在	135
3.1 「として」的意义	135
3.2 关于「として」的分类	136
3.3 关于「としては」的用法及分类	138
4. 关于“作为”和「として」的用法分类	147
4.1 “作为”的意义和用法分类	147
4.2 关于「として」的意义和用法以及用法分类	154
5. “作为”和「として」的对应关系	169
6. 小结	173
6.1 汉语介词“作为”的意义和用法	173
6.2 日语复合格助词「として」的意义和用法	175

6.3 “作为”和「として」的对应关系.....	177
--------------------------	-----

第五章 汉语的“对+N₁的+N₂”和

日语的「N ₁ に対するN ₂ 」	179
1. “对”和「に対して」的连体形.....	179
2. 有关以往“对+N ₁ 的+N ₂ ”结构的研究和问题所在	181
2.1 有关“对+N ₁ 的+N ₂ ”结构的分类	181
2.2 “对+N ₁ 的”可以修饰的“N ₂ ”(N·V·A)	186
2.3 作状语的“对N……”结构向作定语的 “对N的N”结构的转换	196
3. 关于「N ₁ に対するN ₂ 」	197
3.1 关于「N ₁ に対するN ₂ 」结构中的「N ₂ 」的性质	197
3.2 关于「N ₁ に対するN ₂ 」结构的分类说明	200
3.3 有关日语的连体修饰语向连用修饰语的转换	208
4. “对+N ₁ 的+N ₂ ”和「N ₁ に対するN ₂ 」的对应关系	211
5. 小结	215
5.1 关于“对+N ₁ 的+N ₂ ”	215
5.2 关于「N ₁ に対するN ₂ 」	216
5.3 “对+N ₁ 的+N ₂ ”和 「N ₁ に対するN ₂ 」的对应关系	217

第六章 今后的课题

1. 本书的总结	218
1.1 共同点	218
1.2 不同点	220
2. 本书的成果与语言教学	222
3. 今后的课题	223

参考文献

主要资料来源	237
有关体例的说明	243

第一章 绪 论

1. 本书的写作目的

纵观迄今为止日语复合格助词的研究，我们可以发现存在着以下两方面的问题。

其一，以往的研究仅限于对复合格助词语义的解释，而对于各个复合格助词的用法并没有加以详细的说明，特别是对于上述用法没有实施严格的分类，同时对于复合格助词同单个格助词的替换使用等问题也没有进行充分的论述。^①

其二，以往的研究对于日语复合格助词与汉语之间的比较研究论述甚少，或者说该领域几乎未被开拓。

比如，砂川(1987)虽然给复合助词下了定义，进行了分类，并从意义和句法等角度对复合助词的特性进行了细致的分析和详细的说明，但是对于各个复合格助词的用法并没有加以分类，也没有进行详细的分析。

再如，森田、松木(1989)虽然采用“以例句为中心阐述复合助词的意义和用法”(「用例中心・複合辞の意味と用法」)的副标题，把具有和助词同样作用的词语分为具有与格助词、提示助词、副助词、接续助词、并立助词和终助词同样作用的各种类型，较为广泛地对于复合助词进行了概括性的说明，但是涉及到对各个复合格助词的用法的详细说明则较为欠缺，至于对各个复合格助词之用法的分类则更是十分薄弱。

① 有关此类问题，在本章 2. 节亦将继续论述。

第三,佳码析疑研究小组^①所编的《日语句型词典》(1998)虽然在连语表现方面取得了巨大成果,提出了许多重要见解,但是对于各个复合合格助词的用法仍然没有加以细致的分析,也没有进行具体的分类。

此外,包括上述研究在内,以往的研究并没有对日语复合合格助词与汉语介词之间的比较研究进行充分的论述(有关日语复合合格助词与汉语介词之间的比较研究的重要性,本章将后述。)

另一方面,汉语的介词研究,在20世纪50年代以后,特别是从80年代开始有了长足的进步,取得了巨大的成就。主要代表著作有北京大学中文系1955、1957级语言班编《现代汉语虚词例释》(1982)、陆俭明、马真著《现代汉语虚词散论》(1995)、傅雨贤等著《现代汉语介词研究》(1997)、侯学超编《现代汉语虚词词典》(1998)、张谊生著《现代汉语虚词》(2000)等。

但是,我们应该看到在汉语介词的研究中仍然存在着下列问题:

第一,对于每个介词的各种不同用法,以往研究虽然进行了一定的论述,但是在深度上仍然显得较为欠缺。

第二,在以往研究中,并没有展开有关汉语介词同日语复合合格助词之间的比较研究。

对此,我们可以列举下列实例进行具体的说明。关于本书所论述的“关于”、“作为”等汉语介词的各种用法,以往的研究论述得并不充分。虽然也进行了一定的阐述和说明,但是仍然存在着下列问题。比如:

- (1) a 张虎作为特级教师参加了那次座谈会。
張虎さんは特級教師としてその座談会に参加した。
- b 把自己的研究所得作为一家之言贡献给读者。
自分たちの研究を一家の言として読者に献げる。

① 徐一平等在的《日语句型词典》(2001)的中文版中,将日文「グループ・ジャマシ」译为佳码析疑研究小组。

在例句(1)当中, (1)a 的“作为”的介词宾语(“特级教师”「特級教師」)同句子的主语(“张虎”「張虎さん」)发生联系。与此相对, (1)b 的“作为”的介词宾语(“一家之言”「一家の言」)则同句子的宾语(“自己的研究所得”「自分たちの研究」)发生联系。然而, 以往的研究仅仅指出诸如(1)a 类型, 而对诸如(1)b 类型, 并没有进行任何说明。如果我们从格语法的角度进行分析的话, 可以把(1)a 和(1)b 分为两种不同的类型, 即“作为”的介词宾语同句子的主语发生联系的类型, 和“作为”的介词宾语同句子的宾语发生联系的类型。

对于第二点, 我们可以列举下列实例进行具体的说明。在中日语言对比研究领域, 对汉语介词同日语复合格助词之间的比较研究论述甚少, 即使在堪称中国第一部《漢日比較語法》^①(赵博源 1999)(『中日比較文法』)当中, 对汉语介词“对”和日语复合格助词「に対して」之间的对应关系、以及汉语介词“作为”和日语复合格助词「として」之间的对应关系没有进行论述, 对于汉语介词“关于”和日语复合格助词「について」, 虽然有一定的论述, 但是也存在着下列问题。赵博源(1999)虽然将“关于”与「について」的对应关系归纳为“关于、有关、就/について [は]”, 但是, 正如例句(2)所示, 赵博源(1999)似乎并没有注意到日语「について」和「については」之间的区别。

- (2) a 東廊下から裏庭へ出るドアについては(×について)、
 いったんタオルでノブを拭ったあと、卓夫が廻した。
 b 至于(×关于)从东走廊通往后院的门, 卓夫用毛巾擦了之后, 转动了门把。

实际上, 我们应该看到「については」和「について」的用法完全不同, 「については」可以和表示具体动作的动词(「廻す」“转

① 山东大学日本研究中心主任教授、中国日本文学研究会副会长金中先生在推荐该书时曾明确指出: “类似这部《汉日比较语法》的著作, 无论在中国或日本, 都尚未见有问世, ……”。

动”) 在同一个句子中共同使用, 同时「については」不是同汉语的介词“关于”相对应, 而是同汉语的介词“至于”相对应。

本书的写作目的, 是为了澄清有关日语复合格助词和汉语介词研究方面所存在的诸种问题。关于进行日语复合格助词和汉语介词比较研究之意义, 本书作者认为可以从以下两个方面进行探讨和归纳。

第一, 如上所述, 我们可以认为日语复合格助词和汉语介词之间的比较研究尚属一个未被开拓的领域, 因而对日语复合格助词和汉语介词的诸种用法进行比较, 阐明其异同, 不仅将分别有益于日语复合格助词和汉语介词的研究, 而且将对两种语言的综合研究有所贡献。

第二, 本书作者在日中两国语言的教学实践中, 备感日语复合格助词和汉语介词对于学习汉语的日本人和学习日语的中国人来说, 是一大难关。因此, 开展日语复合格助词和汉语介词之间的比较研究将有益于两国的语言学习者突破复合格助词和介词这一语言学习上的难关, 并将对两国的日语教学和汉语教学有所贡献。

2. 有关日语复合格助词和汉语介词的定义

在日语学界, 以往的研究对于复合助词特别是复合格助词是怎样进行定义的呢?

砂川(1987)认为“一个以上的词结合在一起, 具有与助词相同的作用, 我们把这种语言形式(～からには、～によって、～とともに等)称为复合助词。”(「複数の語が結合して助詞と同じような働きを持つようになった形式(～からには、～によって、～とともに、など)を、複合助詞と呼ぶ。」(p.42))。松木(1995)认为“几个词复合在一起, 以一个整体的形式发挥与助词相同的作用, 我们把这种语言表现称为‘复合助词’。”(「いくつかの語が複合して、ひとまとまり形で助詞と同様の機能を果たしている表現を『複合助詞』

と呼ぶ。」(p.54))。但是,“与助词相同的作用”是指什么?怎样才算形成“一个整体的形式”?上述定义并没有明确复合助词的认定标准。仁田义雄先生在《日语教育词典》(1982)有关〈助词〉(p.392)一项中,虽然把「について、に対して、として」等称为复合合格助词,但是对于复合合格助词本身也并没有提出具体的定义。

然而,与上述研究不同,塚本(1991)从形态特征、句法特征和意义特征等方面对于日语复合合格助词进行了较为全面的探讨和颇为详尽的说明。本书首先把塚本(1991)的主要论述归纳为以下三点,具体地进行介绍。

2.1 复合合格助词的形态特征

A. 复合合格助词的种类。

“‘所谓复合合格助词’可以区分为以下两大种类:第一种,在动词的连用形之后附着「て」,上述形态再后续在某个单个连用格助词之后的类型;第二种,在连体格助词或者连用格助词之后接续几乎完全形式化了的名词,另外再在上述形式之后接续单个连用格助词的类型。」「複合格助詞」とは、(ア)動詞の連用形に「て」が付着した形態が何か単一の連用格助詞に後続したものと、(イ)連体格助詞或いは連用格助詞にかなり形式化した名詞が続き、またそのうしろに単一の連用格助詞が来たもの、の二つに大別される……)

- (ア) a ~において、~について、~に当たって、~に際して、~に関して、~に対して、~にとって、~にわたって、~によって
 b ~をおいて、~を指して、~をして、~を目指して、~をもって
 c ~でもって
 d ~として
 (イ) a ~のために、~のくせに、~のおかげで、~のせい